

3.4 寛保二年（1742）の^{いぬ まんすい}戌の満水

寛保二年（1742）の洪水「戌の満水」は、全国的にも近世以降最大の水害と言われています（信濃毎日新聞社出版局，2002）。千曲川流域の死者は2800人前後と推定されています。

松本城下町周辺でも激甚な被害が発生しました（松本市，1995）。寛保二年八月（1742.8）には、女鳥羽川が^{みずくま}水汲下流で切れ込み、安原町・下横田・和泉町を襲い、薄川も氾濫して宮村・小池町を浸水させました。松本城下町の様子は、「松本満水、大手の川ことごとくで、^{あげつち}上土道を押さきり、堀と川一つになり、上土の堀残らず砂入り埋まる。中町裏通り家々の蔵の下まで二間（3.6m）ほども欠け入り、東町大橋落ちる。油屋喜左衛門と申す者の家流れ、喜左衛門夫婦流死し、死骸は^{しらいた}白板、熊倉にて上る。上土は延享元年（1744）の春ま

で馬の引きとおりなし」（浅間、二木千畝文書）と書き留められています。

城下町だけでなく、上流の浅間村（本郷・浅間温泉）でも激甚な被害となりました。図3.7は、浅間温泉に流下した土石流・洪水で、本郷村誌編集会（1955,1956）などをもとに作成しました。

七月二十九日～八月一日（1742.8.29～8.30）に豪雨が降り続けました。一日の夜10時頃、横谷沢奥で山崩れが起り、沢水と一緒に山津波となりました（表3.1）。流出土砂は湯坂付近に押し出し、小柳（現松本十帖）より南で20軒余りが流失しました。また、人家に大石や土砂が押し込むという大惨事が起りました。前日より鳴動山鳴りが頻りであったため、村人は家財をまとめて、出先山（桜ヶ丘）へ避難し、人畜に被害がなかったのは幸いでした。

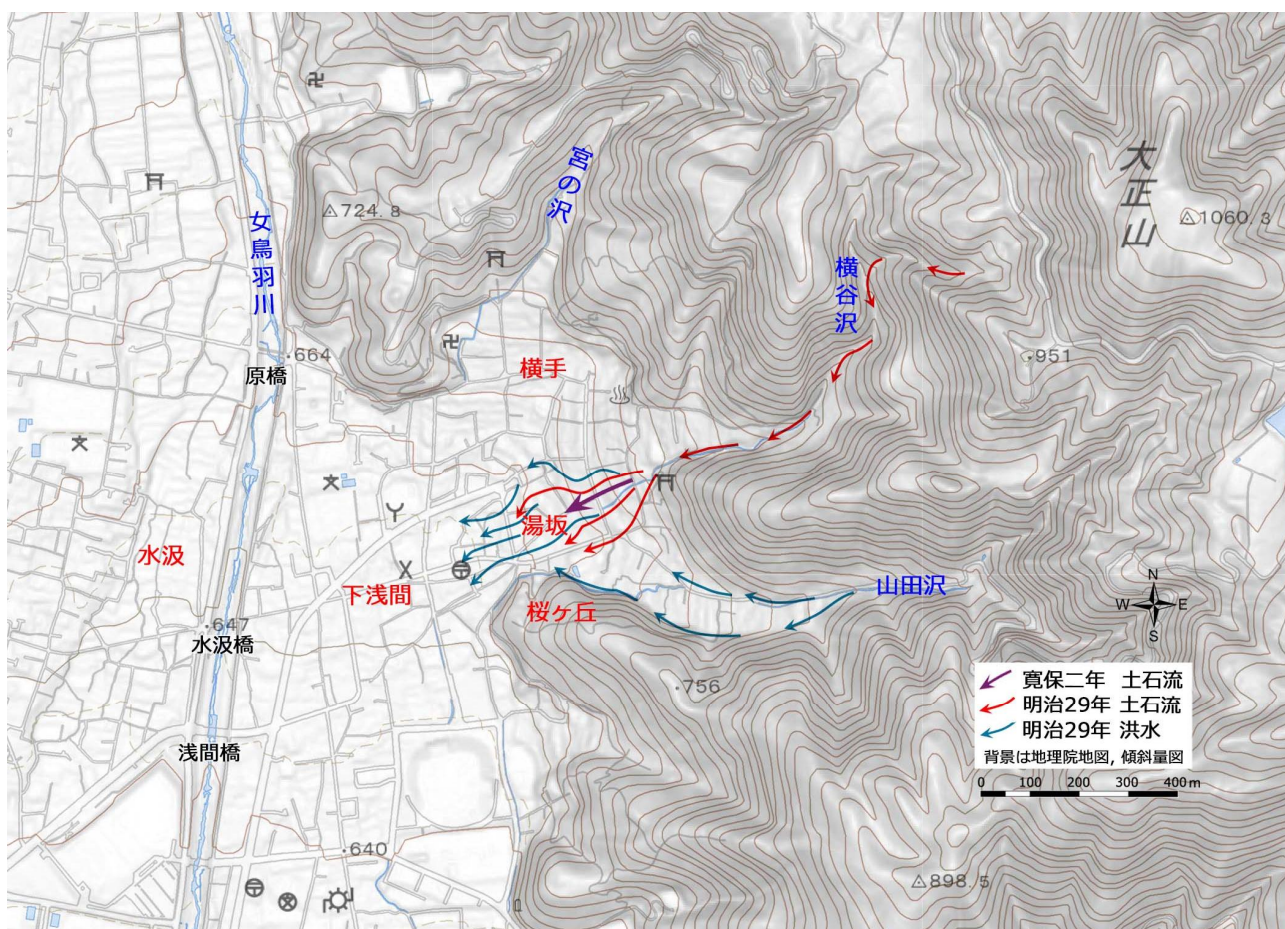


図3.7 浅間温泉に流下した土石流・洪水
（地理院地図「傾斜量図」，国土地理院基盤地図情報をもとに作成、
本郷村誌編集会（1956）などをもとに追記）

○上浅間温泉の土砂災害

この時の災害を書いた「寛保二壬戌年八月・岡田組浅間村家屋舗流帳」(浅間、二木千畝文書)によると、石砂で押埋めた家は 10 軒、半潰れは 10 軒でした。このほか土砂が押込んだ家は 10 軒、水が押し込んだ家は 8 軒でした。また、田畑の流失・石砂流入などで貢租高 49.38 石の大被害を受けました。

被災民は上浅間では再度の災害の危険性があるとして、温泉街西側の田地に移住することを松本藩に要望しました。その結果、現下浅間の字**念仏田**(写真 3.5 の下浅間薬師堂のあるところ)付近の水田 2 町 1 反 2 畝 21 歩の場所が屋敷地として許可されました。被災民は屋敷割をつくり、早々の住居移転が認められました。この新屋敷地は、中世(建武二年(1335)～天正十一年(1583))の浅間郷地頭の赤沢氏代々の居館(旧本郷小学校校庭)のあった南側に設けられていた館町の跡でした。南北の町並みは立町、これより鍵の手に東西にある町並みは横町と言われています。

町並みの建設で田地を潰すことは、それだけ減税(年貢)となるため、相当の曲折があったようです。何分にも領主入湯地で、御殿の所在地であるところから、領主の面目もあり、悲惨な状態をなくすため、集団移転が認められました。当時の村役人や大庄屋の骨折り、浅間村民一同の結束により、その働きかけが効を奏したものと思われます。

このようにして、新屋敷割ができ、35 軒が引き移って、湯久間が出来ました。湯久間は後に新浅間と地名が変わり、さらに江戸時代末期に下浅間と改称されて現在に至っています(図 3.6 左図で、浅間温泉西側の町並)。

その後天保十三年五月(1842.6)に至って、宮の沢が洪水となり、横手(現第一常会)及び沢添地籍の田畑が土砂を覆り、災害となっています。

写真 3.5 は、横町にある下浅間薬師堂、写真 3.6 は堂前にある石仏です。説明看板には、「この石仏は元禄十一年(1698)に横谷沢の大水時に湧出した源泉で発見され、薬師堂に移設された。」と記されています。



写真 3.5 横町にある下浅間薬師堂, 2024 年撮影
この石仏は元禄十一年(1698)頃、横谷沢の大水時に湧出した源泉で発見された。



写真 3.6 薬師堂前の石仏, 2024 年撮影